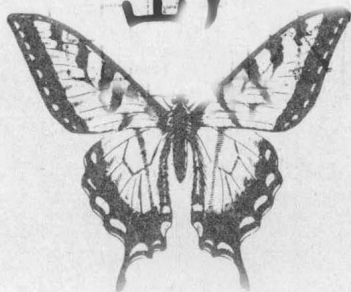


迷蝶の島

泡坂妻夫



迷蝶の島



泡坂妻夫（あわさか つまお）

本名・厚川昌男

昭和8年、東京生れ。九段高校卒。紋章上絵師を職業とし、余技の奇術では43年、石田天海賞を受賞。51年、「DL2号機事件」で第一回幻影城新人賞小説部門佳作入選。53年、「乱れからくり」で推理作家協会賞受賞。

主な著書

「11枚のとらんぷ」角川文庫

「乱れからくり」角川文庫

「湖底のまつり」角川文庫

「花嫁の叫び」講談社

迷蝶めいちようしまの島

昭和五十五年十二月二十日 第一刷

定価九八〇円

著者 泡坂妻夫

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

序章

5

一章

迷う蝶

8

二章

夢の蝶

115

三章

死ぬ蝶

175

終章

230

装帧  
安彦勝博

迷蝶の島



## 序章

朝から悪い予感があった。

昨夜、近星ちかぼしを見たためだ。月に接近して現われる星が近星である。郷里の鹿児島では死人星しびとほしと呼ぶ。それが出ると必ず誰かが死ぬといい、ひどく忌み嫌う年寄りがいた。

完東漁業所かんとう所属のまぐろ漁船、第七みしま丸の船長、末広鶴吉は、その日、九月八日の一日、必要のない行為を一切慎むことにした。

丸一か月の航行、操業、全て順調であった。午後には八丈島の線に着き、翌日には帰港だ。どうしても気の緩みゆるみがでるときで、それだけに、心を引き締めるに越したことはない。

一二時。通信係が船長室へ来た。近くで救助信号をキャッチしたと言う。「確かに、救助信号なんだな？」

末広は念を押した。海は昨夜からべた凧かまきりで、遭難する船があるとは思えなかったからだ。

ほどなく、末広は双眼鏡で、波間に漂う救命ポートを発見した。ポートには生存者がいる様子だ。

こうなれば、星が悪いなどとは言ってられない。ただちに「至急救助する」の火口ケットを



打ちあげ、補助ボートで乗組員を救助に向わせた。東径一三九度一五分、北緯三三度の海域であった。

救出されたのは、三〇歳前後の女性で、甚だしく衰弱していた。

ただちに衛生管理係の手当てを受けたが、遭難者は、九月三日、クルーザーで八丈島へ向う途中、低気圧に遭い、船が沈没した。同乗者は男子大学生が一人。それだけ事情を説明すると、あとは昏々と眠りに落ちてしまった。

とすると、まだ遭難者がいるはずである。通信長はすぐ三崎漁業無線局に連絡をとった。同無線局は第三管区海上保安本部にこのことを通達した。

「どうも、様子がおかしいですよ」

と、係員が末広に報告した。末広は眉をひそめた。みしま丸の船上で、死者を出したくなかった。

「いや、生命には別状がありません」

と係員は説明した。

「むしろ、身体は思ったより丈夫そうです。ただ、出血をしているんですがね……」

係員は困ったような顔をした。末広も同じだった。死者は嫌だが、みしま丸を血で汚されるのも好ましくない。

再び、無線局に連絡をとった。

無線局から回答があり、海上保安庁のヘリコプターが、現地に赴くことになったので、遭難者を引き渡すようにと言ってきた。

一五時。無事ヘリコプターに遭難者を移した。

末広はぼっとして、いつまでもヘリコプターを見送っていた。  
その後、みしま丸は平穏に帰港したが、もう一人の遭難者は、ついに発見されなかった。

## 一章 迷う蝶

9・15

ひどく疲れている。

昨夜もほとんど寝つかれず、頭痛に悩まされ続けた。

夜が明けたが、食欲は全くない。あっても、身体を動かすと、すぐ動悸がする。食物をとるのもちょっとした仕事だった。

ただじっとしていると、否いやでもあの音が足の下から聞えてくる。どぶり……どぶり……どぶり。耳を塞ふさいでも無駄だった。音は皮膚を通して身体にしみ込み、頭骨を振動させる。そして、おれを寝せつけようとしなない。

まるで腐った汚水が、マンホールに満ちて、怠惰な音を響かせているようだ。誰だっだってあの音を、波だなどとは信じまい。

原因ははっきり判っている。深い洞穴が地の底にまで波を誘い込み、強く反響させているからだ。音は満干みちひにも関係ないようだ。いっそ、時化しければと思うが、空は晴。風は2〜3メートル。

今まですることもなく、ぼんやりと岩にいた蝶を見ていた。

蝶は3センチばかりで、黒い羽だった。印象は蝶より蛾に近い。もっとも、昆虫の知識はなく、蝶と蛾の区別も正確には知らない。

蝶は口吻を伸して、死んだ虫の身体に突き刺し、体液を吸っていた。蝶が死んでいる虫に乗り掛かっているのを見るのは初めてだった。

蝶の胴は、ふよふよした黄色い皮に、灰色の短い羽毛が細かく生えているようだ。虫の体液を吸うたびに、腹がごくごく動く動き、近寄っても逃げようともしないふてぶてしさだ。

これほど長く蝶を見ていた経験は、今までなかったと思う。胴の気味悪さで、かえって目をそらすことができなかつた。

しばらくすると、飽食したのか、蝶は見えなくなった。その後、あの女が見えた。蝶の印象が、あの女に似ていたからだと思う。

おれは何を書こうとしているのだろうか？  
そう、あのどぶりどぶりを忘れるために、ペンを手に持ったのだ。

セーリングバッグの中に、ボウルペンとノートがあったのは有難かつた。文字を連ねてゆくことによつて、おれはいくらかでも人間性を失わずにいられるだろう。

それが目的なのだから、これは日記でもない。読者を想定しているわけではないのだから、手記とは違う。強いて言えば「愚かなる記録」とでもしておこうか。この記録は永久に人の目に触れてはならない。望みがかなったときは、最初にこの記録を消滅させなければならぬのだ。

ノートを開いたときから、書きつける内容は決まっていた。——今、頭にあるのは、あの女のことしかない。こうなつた始まりは、全てあの女が原因だった。

おれをつまらない人生——七か月で早産し、出産時仮死状態だったこと。四歳のとき蝶を捕えようとして二階のベランダから落ち、命は取り止めたが、後遺症があつて、今でも左足を軽く引きずること。小学校の成績は優秀。中学のとき、親父が作った食料品店のチェーン店が爆発的に伸び始め、母までがおれを構ってくれなくなった。文学に没頭し、成績は急速に下落。親父が金を積んで、高校、大学と進学……。

そんなことをだらだら書き続けていては、とてもあのどぶりとどぶりに勝てそうにもないのだ。どうしてもあの女の力を借りなければならぬ。

二年になった今年、4月から、おれは一日も大学に出掛けなかった。大学は経済学部。当然、文学部を志したのだが、兄貴の猛反対を受けた。親父と兄貴は、将来おれを経営者の一人に加えるつもりでいたのだ。もともと文学志向は、兄貴が集めていた小説を読み始めたのがきっかけだが、現在、兄貴の書棚には一冊の小説もなくなっている。彼は小説など軽蔑すること、一人前の実業家になったつもりでいるようだった。

5月、おれは大学には行かず、伊豆の引津マリーナひきつにいた。比較的新しい小さなヨットハーバーで、おれのローリエ号が置いてあった。

ローリエ号はチェイサー23、全長6・85メートルの、卵型をしたプロダクションヨットだ。インボードエンジンを備え、クルーザーとしては小型だが、割に広いキャビン船室があつた。

ハル(艇体)はおれの好みで、白と黒に塗り分けた。真っ白いセイルを張ると、きっちりタキシードを着用した姿に見えるからだ。

「白い波頭ともよく似合うね」と、赤根が誉めた。

顔には出さなかつたが、おれは内心かなり満足した。赤根は引津に住みついていてるペイルクルー（雇いの乗組員）だった。チェイサー23を手に入れたとき、同乗してもらってセーリングの指導を受けたことがあったが、回数は多くはなかった。赤根は競技用の技術を教え込もうとしたからだった。おれは競技には興味を持たなかった。ただ海上に独りだけでいるのが好きだった。その代り、冬の間はローリエ号の管理を赤根に任せていた。

チェイサー23を手に入れることについて、親父たちと多少の摩擦はあったが、とりわけて困難なことではなかった。

おれは母を抱きこむことにした。兄貴も同じだった。若いときはスポーツをしなければいけないと言ひ、高校のとき小説ばかり読んでいたおれに、無理矢理ヨットの味を覚えさせたのが兄貴だった。おれはどうしてもチェイサー23が欲しかったわけではなかった。文学部を断念した見返りとして、クルーザーをねだっただけの話だ。

ヨットの手ほどきは兄貴から受けていた。高校にもヨットクラブはあったが、おれはそれを避けた。もともと、集団の中に入ると、結果のよくないことが多かった。

兄貴は大学のヨットクラブでセーリングを覚え、共同オーナーのクルーザーも持っていた。おれは兄貴たちと何度か外洋に出たこともあった。だが、いつもそう楽しいとは限らなかつた。兄貴は口うるさかつたし、海が荒れ始めると、おれは真っ先に船酔いになった。穏やかな日、独りだけで沖にいる方が好きだった。

おれが大学に入る頃、兄貴は共同オーナーを抜けた。金儲けの方が面白くなったからだ。だから、おれがクルーザーが欲しいと言ったとき、最初に兄貴が反対した。自分のときは共同オーナーだったという妬みもあつたと思う。おれが稼いだ金で、という気持も持っていたに違いない。

だが、兄貴などはどうでもよかった。おれは母を説得することに成功した。近眼の眼鏡を掛け、部屋に籠って本ばかり読んでいるより、海にいる方が健康的だと母は判断したのだ。もつとも、母の考えているほど、健康的ではなかった。おれはクルージングを楽しむより、海上で独りでぼんやりしている方が多かった。

事実、海上での読書や著作は、予想した以上に快適だった。

その日も、朝のうちローリエ号に本を積み込み、おれは独りで引津マリーナを出航した。

晴れ。気温24度、南東の風4〜5メートル。海は初夏だった。波頭の泡はガラス玉に見える。おれは久し振りにセーリングを満喫しようと思った。

午後になって、風がやや強くなった。ローリエ号は右舷から横風を受けて快走していた。ウィンドアビームの状態で、安定したスピードだった。それがどのくらい続いただろう。かなり長い時間がたったようでもあり、それほどでもなかった気もする。

右舷の方向に一隻のヨットが近付いてくるのが見えた。追い風で、甘いピンク色のメンスル(主帆)とジブセール(補助帆)を観音開きにして、ランニングの状態で走って来る。近付くに従い、豪勢なマキシ艇だということが判った。ハルにチーク材が使われているのでそれが判る。

その船の走り方を見ているうちに、おれはちょっと心配になった。このままだと、ローリエ号の進路を突っ切るようになるのだ。

近付くにつれ、相手の船のセールに印された艇ナンバーと、その数字の上に、百という字をデザインしたセールマークが見えた。船はなお接近したが、今に進路を変えるだろうという予想が裏切られた。

衝突しかねない距離になったとき、おれはあわててしまい、どうしたことかテイラー(舵棒)を

手放した。

運悪く、予想しない突風が吹いた。船が激しく揺れ、バウ（船首）が風上に振れた。メンズルは裏側に風を受け、反対の舷に吹き飛ばされた。

おれはブーム（セールの桁材）で横なぐりされ、危く海中に放り出されるところだった。一瞬早く、コックピット（操舵室）に伏せたので助かった。

相手の船は、おれのセールをかすめて通り過ぎた。

おれは相手の船を見た。ローリエ号がバランスを失っているとき、瞬間目の前を過ぎ去った光景を、今でもありありと目の前に見ることができるといえる。そこに動きはない。一枚の写真のように、おれの脳裏に焼き込まれたのだ。

その船には、二人の女性が乗っていた。

一人はコックピットにいて、びっくりしたように大きな目を開けていた。オレンジのライフジャケットに肩まである髪を風に散らし、はつきりとした、悪くない顔立ちだった。赤い唇から揃った歯が覗いて、何かを言っているに違いない。

もう一人はその女性より若く、デッキに腰を下ろしていた。サングラスを掛けた横顔が見えるだけだったが、コックピットにいる女性とは対照的な感じだった。それは、彼女の腕のせいだ。彼女は半袖のウェットスーツで、裸の左腕はデッキの外にあった。舷に投げ出されたような指先が、真っ白に光って見えた。

おれはその腕の形にどぎまぎした。衝撃と言ってよかった。腕以外の裸の全ても見ってしまったような気がした。

腕は淡く光る小麦色だった。上膊から小手にかけての魅惑的な曲線に感動した。そして、優美



な五本の指は、これまでどんな美術も表現できなかったと思つた。ここに、彼女の腕があることが奇蹟だった。

おれはすっかり度を失つていた。その直後、何をしたかはよく覚えていない。気が付くと、ローリエ号はクォーターで帆走していた。無意識のうちに、彼女の船を追つていたようだ。だが、ピンクのセールは、そのうち見失つてしまつた。

気持が騒がしくなるのが判つた。いつものように、ぼんやりと海を眺めている気がなくなつた。何もかも無意味に思えた。おれはすぐ引津マリナに引き返した。ローリエ号を繋留してから、棧橋に並んでいるクルーザーの中に、ピンクのセールを探したが、無論見当らない。落着いて考えれば、まだ帰港する時間には早すぎた。

ローリエ号を見つけて、赤根が傍にやつて来た。ローリエ号が故障を起こしたとでも思つたようだ。おれはただ気分が變つた、とだけ言つた。

雑談の途中、何気なく赤根にピンクのセールを張つたクルーザーのことを訊いてみた。

「ああ、ピーチズⅡ世ね」

赤根はそのクルーザーを知つていた。

「引津に別荘を持つている、中將ちゆうしようさんの船です」

「チュウジョウ？」

「大將の下の中將ですよ。東京に大きな総合病院を持つているお医者さんだそうです」

「女性にょせいが二人乗つていたのを見た」

「美人びじんでしょう」

赤根はにやりと笑つた。